

「襲のあわい」の立ち現れとしての「おなじ」を問題として  
いる。部漣島<sup>べれんじま</sup>の隠れキリシタンの一婦人のことばであった。「お  
なじ」と同定されたのは、彼女のこころ、信仰といってもいい  
のだろうが、それと宣教師プティジャンのそれ。しかし、当の  
プティジャンはやがて口にするようになる、「なにもかにもめ  
ちゃめちゃです」と。なにがそうだというのか——「とりて  
食らえ、これはわがからだなり。…なんじらみなこの盃より飲  
め、これは契約のわが血なり…」がである。それがどうして「め  
ちゃめちゃです」といわれるのか——「あの日は、ちょうど  
切支丹歴<sup>きりしたんれき</sup>で、謝肉……これ以上、私にはかけません。おお、神よ」  
だからだ。「御主さまのおんいけにえも、十二使徒も、御復活  
も…」といわれるゆえんである。

この「めちゃめちゃ」の事態に、中沢新一<sup>(1)</sup>が「反転」の規  
則をみることは前述した。神話の論理のなかにセットされてあ  
る独自の力動的な構造であり、もとなつた神話の意味内容や  
登場者の関係を、ひっくり返したり、捻じ曲げたりしながら、  
ひとつの神話が内包する意味を、もつともつと豊かに表現し  
ようとするのだという。

「ゼススさま [イエス：筆者挿入 (以下同様)]」が、「ナサレ  
テと申す国の若君 [十すさま]」とされ、かれは「サンタ・マ  
リア [聖母マリア] さま」であつたはずの「姫君お影さま」を  
恋い慕うことになる。原罪を贖うる唯一の可能的関係性＝「聖  
母子の関係」が、こうして墮罪の究極因たろう「情人関係」に  
置換され、あまつさえ、「もつたいなやお影さまは、[馬小屋な  
らぬ] 牛小屋の中で [十三番目の弟子] ジョタス [ユダ] の子  
をお生みになりました…」という顛末である。

この「なにもかにもめちゃめちゃ」の次第が「反転」である。  
しかし、この次第が「ひとつの神話が内包する意味を、もつと  
もつと豊かに表現しようとする」といわれるのはなぜか。

中沢によれば、キリスト教正統の世界では、このような神話  
的変形への動きを封じ込めようとする力が、最初から働いてい  
た、たとえばグノーシス主義運動にたいするそれのように。その  
結果、「イエスの生涯」をめぐる神話は、発達のある段階で  
完全にその変形運動、すなわち「反転」をやめた。みかたをか  
えれば、ここに「正統」というものが確立されたというわけだ。  
「ニケーアの公会議」(325)を考えればいいのだろう。神話そ  
れ自体にとっては、ある一時期、ある一地域における任意の一  
ヴァージョン、それ以上でもなければ、それ以下でもないもの、  
それが、唯一、「真実の歴史と真理」を内包し伝播するもの  
として「決定」された。爾余のすべては、「異端」、さらには「異教」  
として排除の対象とされていく。こうしてみていくとき、キリ  
スト教「正統」を体現する宣教師プティジャンをして驚天動地  
せしめる事態、「なにもかもめちゃめちゃです」の次第は、200  
年にわたるキリシタン禁教弾圧の環境のもと、「正統」的権威  
の干渉を回避し、「反転」という神話の力動的プロセスが自律  
的に機能しつづけた帰結にほかならない。この「反転」による  
変形に、マグダラのマリアに込められた娼婦的イメージを髣髴、

接合することは容易であり、さらには、そこにかがえるエロ  
ス性を根源的に捉え返し、グランドマザー (大地母神) に通底  
していく、そのことを押しとどめることは、誰にも、またなに  
にもではしない…はずなのだ。しかし、キリスト教正統の世界  
では、この不可能が可能となり、「真実の歴史と真理」の世界  
として永続的に構造化してきたのである。先の表現を繰り返せ  
ば、文字通り任意にすぎないヴァージョンが唯一のそれとし  
て流通してきたのだ。部漣島の隠れキリシタンによるキリスト  
教教義の変形ヴァージョンの噴出は、このいわばグローバル通  
貨が、その実、虚空に織り上げられた一ローカル通貨の遙けき  
映射にほかならなかつたことの証左か。その瞬時、虚空に漂い、  
その可能態にとどめられつづけ、実在を許されなかつた爾余の  
無限のローカル通貨がみずからとしてその姿を取り戻したとい  
うことか。かかる状況を、「ひとつの神話が内包する意味を、もつ  
ともつと豊かに表現しようとする」とみるのか、あるいは、プ  
ティジャンのごとく「なにもかにもめちゃめちゃです」とみる  
のか、それとも…。

この択一めいた問い掛けに、中沢の言及するハイヌウェレ型  
神話が応答しはしよう、とりあえずは…。いささか先走ってい  
えば、この「とりあえずは…」に本稿の論点は収斂していくこ  
とになるのだが、そこへの論及は、いまだ時期尚早ということ  
で、今はハイヌウェレに立ち戻らねばならない。

吉田敦彦<sup>(2)</sup>によれば、ドイツの民族学イェンゼン (1899～  
1965) はインドネシアのモルッカ諸島、セラム島に住むウェ  
マーレ族のもとである神話を採集し、その主人公の名にちなん  
で「ハイヌウェレ型神話 (傍点筆者)」と名付けた。「～型神話」  
といわれるのも、当のインドネシアからメラネシア、ポリネシ  
アを経て、南アメリカから北アメリカの一部にまで、ほぼ環太  
平洋といってもいい広大な地域にまたがって「ほとんどそつくり  
と言えるほどよく似た神話が流布している」からにほかなら  
ない。日本でも、『古事記』にみられる大宜津比売神<sup>おおげつひめのかみ</sup> (大気都  
比売神とも)、あるいは『日本書紀』における保食神<sup>うけもちのかみ</sup> (宇気母  
知能加微とも) が主人公ハイヌウェレの役割をほぼそのまま演  
じている。

その共通する性格は、基本的に食物起源神話なのであるが、  
そこに介在するのはハイヌウェレおよびそれに同定される女性  
(神) のきわめて不可解な死とその状況・形態なのである。

吉田による紹介を辿っての確認は次稿にゆずることとなる。

[註]

- (1) 「エデンの園の大衆文学」(青木保他編『近代日本文化論9  
宗教と文学』岩波書店、1999所収)
- (2) 『昔話の考古学』中央公論社、1992